

家相観の受容過程に関する民俗学的研究覚書

宮内貴久*

はじめに

村落空間そして住居空間を、村落空間の景観や村落内の墓地、神社、小祠等の空間配置を通して、あるいは住居の間取りや年中行事、人生儀礼の場面での部屋の使い方や建築儀礼を通して把握し、そこに住む人々の世界観を探る研究が近年盛んである。特に隣接科学である社会人類学では、沖縄研究の中から村武精一⁽¹⁾、渡邊欣雄⁽²⁾などの研究者による沖縄における村落空間と世界観の研究が成果をあげている。特に渡邊は村落空間と世界観の背景に見いだされる風水思想に注目しており、中国、台湾、朝鮮半島までも視野に入れた研究は非常に興味深い⁽³⁾。

民俗学においても、ムラを一つの世界として捉えることによって、そこに儀礼、年中行事、信仰など様々な姿によって表現される人々の社会観、世界観を明らかにしようとする試みが行なわれ成果をあげている⁽⁴⁾。近年では、ある種の空間モデルの提示が盛んで、例えば、福田アジオは村落空間をムラ・ノラ・ヤマという同心円モデルで捉えている⁽⁵⁾。

また、宮家準はこうした「山峽にひらけたり、背後に山を持つ海辺など複雑な地形を持った場所に拓かれることが多い日本の村落共同体の空間構造から世界観を抽出する際には、こうした二元論あるいは三元論にたつ空間モデルをそのまま適用することには疑問を感じられないでもない。」と述べており、日本における村落景観の原型をなすといわれる山麓にひらけた村落をイメージにおいて村落共同体の空間モデルを提示している⁽⁶⁾。

近年では、ある種の空間モデルの提示が盛んで、こうした多くの研究から様々な空間モデルが提示されているが、宮家も述べているように、様々な地形のもとにある村落空間と空間モデルとの間には、必ずギャップが存在している⁽⁷⁾。

また、一口で空間モデルと言っても、従来の大部分の研究がそうであるように、研究者自身によって構築された空間モデルだけではなく、近年、渡邊が試みているような風水思想などのような、ある固有の思想・原理を空間モデルとして捉え、その空間モデルを造形したものとして村落空間・住居空間を捉える方向⁽⁸⁾の二つがある。

本稿では、後者の立場に立ち、民俗学の立場からの風水思想研究への可能性を考えていきたい。

1 風水思想

1 風水思想は陰陽説、五行説を基盤とした思想である。土地の気の流れと土地の相（地相）の陰と陽を占うことによって、その土地の人々に降りかかる災禍を防ぎ、幸福を招こうとする考え方とその実践を意味する。都市、村落、住居といった生きている人間の活動の場を「陽宅」、死んだ人間の場である墓を「陰宅」と呼ぶ。良い地相の土地にバランスよく「陽宅」と「陰宅」を建設することによって、災禍を防ぎ幸運を呼ぶことができるとされている。

(1) 風水思想研究史

本節では、日本における特に民俗学、文化人類学の風水研究史を整理していきたい。

日本における風水研究は戦前にさかのぼること

*筑波大学大学院歴史・人類学系研究生

が出来る。戦前の朝鮮総督府編・村山智順による『朝鮮の風水』(1931)⁽⁹⁾は、朝鮮半島の風水説を取り上げ検討している。

その後、長い間民俗学、文化人類学においては、風水研究は下火であった。しかし、その間、東洋思想の分野で牧尾良海による思想史の立場からの風水研究が成果をあげている⁽¹⁰⁾。デ・ホロートの『中国の風水思想—地相術のパラドクス—』⁽¹¹⁾の翻訳を行なっている。また、牧尾の門下生らによって、思想史的な立場からの研究が進められている⁽¹²⁾。

一方、民俗学、文化人類学では、沖縄研究や台湾⁽¹³⁾、中国⁽¹⁴⁾、韓国⁽¹⁵⁾をフィールドにした研究のなかで、村落空間論や墓地研究等で断片的に風水説に注目しているものがある。例えば民俗学では、赤田光男は他界観研究のなかで、沖縄、朝鮮などの墓地風水説の研究を行なっている⁽¹⁶⁾。文化人類学でも、沖縄研究の中に見いだすことができる⁽¹⁷⁾。

最近の研究動向をみると、渡邊欣雄⁽¹⁸⁾をはじめとして沖縄研究において精力的に風水研究が進められている⁽¹⁹⁾。しかしながら、まだ実証的な立場からの風水研究は遅れているようである。

これまでの、民俗学、文化人類学における風水研究は、沖縄や台湾等をフィールドにした研究がほとんどである。文化人類学における風水研究は、沖縄の世界観を描くことを目的とする村落空間、あるいは住居空間の象徴論的な研究から発展したと私は考えている。つまり、既存の研究者は二元論あるいは三元論で象徴的に沖縄の世界観を描こうとしたが、現実の村落空間の構成と理論構築した二元論的、あるいは三元論的な空間構成との間のギャップに気が付き、その気が付いた研究者の中から風水研究を指向したものが現われたと私は考えている⁽²⁰⁾。

このように、既存の風水研究は日本本土をフィールドにした研究ではなく、朝鮮、台湾、沖縄をフィールドに研究されたものであり、しかも文化人類学や東洋思想の立場からの研究がほとんどといってよい。換言するならば、異文化研究の

文脈で風水研究が進められていると言えるかもしれない。

もちろん、日本本土における風水研究もないことはない⁽²¹⁾。とはいえ現状では、民俗文化を研究する目的を持つ民俗学の立場からの、日本本土における本格的な風水研究は、これからであるのが実状である。

こうした民俗学の立場からの風水研究の遅れを、渡邊欣雄は比較民俗学について言及している論の中で、彼は従来の民俗学者は風水説が日本本土にあることを知らなかった、そして風水説を扱うことは比較民俗学になるので扱ってこなかったと述べている⁽²²⁾。しかし、私は風水説(地相・家相)のような文字によって記述されている一つの確立したような印象を与える知識体系、換言すると文字化された(すでに記述されている知識)のようなものは、従来の民俗学では聞き書きを主要な研究方法としてきたため軽視されてきたので、民俗学において風水研究が立ち後れてしまったのだと思う。例えば、多くの民俗誌や民俗調査報告書では、宅地や間取りの選定において、宗教者や大工が関与しており、何らかの文書が使用されていること、鬼門などの方位の吉凶が占われるということについては言及しているが、具体的にどのような内容の文書なのか、方位の吉凶を占う基礎になっている知識体系とはどのようなものかという点については関心を示しているものはほとんどない。また、こうした方位の吉凶を占う知識は画一的なもので、そこに地域性は見られないだろうという暗黙の了解(誤解?)があったように思われる。したがって、これからの民俗学の風水研究では家相書等の文書を重視していく必要があると思われる。

次節では、日本本土における風水思想の受容過程とその特徴を概観していき、民俗学における日本本土における風水研究の可能性を模索していきたい。

(2) 日本本土における風水思想の受容

日本本土にいつ頃、風水思想が受容されたかという正確な時代は不明である。また、何をもって

風水思想が受容されたかという定義によっても、その受容時期にはずれがでてくるであろう。最近の研究では、7世紀の高松塚古墳の石室内の四方に朱雀、白虎、玄武、青龍の図が描かれているものも発見されている⁽²³⁾。

風水思想の伝来を9世紀以前であるとフーチュワン (Feuchtwang)⁽²⁴⁾ は述べている。しかしながら、平城京 (710) の建設、難破京 (744) の建設、平安京 (794) の建設プランには、風水思想の影響が見られるとする説もあり⁽²⁵⁾、8世紀以前に伝来したとも考えられている。吉野裕子は伊勢神宮の祭祀及び大嘗祭の分析から、朝廷に積極的に陰陽道が導入されたのを天武・持統期であるとしており⁽²⁶⁾、このことからこの時期には風水思想も受容されたのではと推定することも可能であると考えている。また、風水思想は易に大きく影響を受けており、易・暦の伝来は503年に百済から伝来したという説もある。渡邊欣雄は、遅くとも6世紀以前には伝来したという推測も十分可能であると述べている⁽²⁷⁾。

朝廷では8世紀頃には陰陽寮が設立されている。平安朝には賀茂・安倍両家が陰陽家として朝廷から重用され、なかでも安倍晴明は大家として有名であり、数々の伝説もある。また、陰陽道、風水思想は平安期には貴族階級を中心に受容され、方違えや物忌み等の習俗が流行した。また、陰陽道、風水思想は神道、密教、仏教などにも徐々にとりいれられていった。

中世には安倍家は土御門家となり、朝廷の厚い加護を受け、全国の陰陽師を統率した。その後、陰陽師の中には民間に埋もれていった者もある。

戦国期、応仁の乱までは朝廷を中心にして受け継がれてきた陰陽道は崩壊する。多くの陰陽書は散逸し、中央で活躍していた陰陽師達も地方へ都落ちしていった⁽²⁸⁾。

近世に入ると、江戸幕府から土御門家が陰陽道宗家として認められ、再編されていく⁽²⁹⁾。しかしながら、陰陽道に専門的に認められていた土地占い等の「占考」が、修験をはじめとする民間宗教者たちによって行なわれていることに対する訴

訟等が多くなる⁽³⁰⁾。このことは、陰陽道の知識、風水思想が多くの宗教に融合していったことを暗示している。江戸時代中期以降、大阪を中心として家相書が数多く出版されていった⁽³¹⁾。

(3) 日本本土における風水思想の受容の特徴

古墳時代においては、古墳造営においても風水思想の影響を見ることができ、陰宅風水もみられた。しかしながら、その後、陰宅風水は発達しなかった。

古代には平城京や平安京等の都市計画にも風水思想の影響を認めることが出来る⁽³²⁾。陽宅風水の中の都市計画である。都市計画において、明らかに風水思想の影響が認められるのは古代都市までであり、それ以後の都市においては風水思想の影響を認めることが出来る都市はない。近世の江戸、金沢といった都市が風水思想に基づいて作られているという説もある。しかし、これらの都市が風水思想に基づいて計画、建設されたという証拠はない。このような説は、現在の都市景観から風水思想に合致しているという推測であり、結果論として風水思想が持ち出されているのである。つまり、風水思想に基づいて建設されていない都市に風水思想を持ち込んで解釈しているのである。

日本本土において、風水思想の陽宅風水説に基づいて、都市計画、あるいは沖縄のように村落建設や村落移動⁽³³⁾ がなされるということは発達しなかったといえる。

日本本土において発達したのは風水思想の中の陽宅風水であり、特に住居に関することであった。そして、それは「家相」として発達していった。家相が特に重視されていったのは近世以降である。そして、現代に連なっている。しかしながら、現代では、墓相つまり陰宅風水にも注意を払うべきだと言う説やこのことに関する書籍が出版されるようになっている⁽³⁴⁾。

日本本土においては、中国、朝鮮半島や沖縄と違い、陰宅風水はほとんど発達せず、陽宅風水、特に家相が発達していった。こうした日本における風水思想の受容形態は、文化変容として捉える

ことができるだろう。そして、なぜ日本において、陰宅風水が発達していかなかったかという点についても、今後の大きな課題である。

逆に言えば、なぜ日本本土において、これ程まで陽宅風水、時に家相が発達してきたのかという点について考えていく必要がある。現時点での日本本土における風水研究は、立ち後れているのが現状である。こうした現状を打破するためにも、日本本土における風水研究、特に家相研究を進める必要がある。

2 家相研究

これまでの家相に関する研究を概観していき、従来の研究の成果、問題点をみていき、民俗学における家相研究の可能性について考えていきたい。

(1) 家相とは

前節ですでに述べたことだが、家相は風水思想の知識の一部分である陽宅風水の中の更に一部分である住宅風水の一部分である。住宅風水は大きく分けて、宅地と住居の二つの部分から構成されている。家相は特に住居の部分についてのことであり、宅地に関することは地相と通例呼ばれる。そして、風水思想においては、宅地、すなわち地相は非常に重視されるが、家相に関してはあまり重視されないのが一般的である。

しかしながら、日本本土においては、家相と地相は別の物であるにもかかわらず、地相を調べたうえで家相が調べられるため、地相と家相はしばしば混同される傾向にある。また、家相観という考え方自体が、家相と地相の両方を含んで理解されることが多い。横山敬の研究によると、家相という言葉は18世紀初期から使われるようになり、その意味する内容も、初期には地相のことを意味していたのが、18世紀末期頃には「家」そのものをみて占うことを意味して用いられていたことが明らかにされている⁽³⁵⁾。

日本における家相判断は中国、朝鮮とはかなり違う。違いは基準とする軸線にある。すなわち、

中国、朝鮮半島の場合は、南北を結ぶ線を基準にして判断される。一方、日本の場合は、東西南北の方向も調べられるが、基準となるのは南北、東西を結ぶ線ではない。基準となるのは、北東（艮・鬼門）から南西（坤・裏鬼門・病門）を結ぶ軸、北西（乾・天門）から南東（巽・地門）を結ぶ軸が基準となる。特に北東―南西の軸が重視され、北東の方角は鬼門として嫌われ、この方角に玄関、窓、便所、台所等を作ることが一般に嫌われた⁽³⁶⁾。

こうした「家相」という言葉が持つ意味の重層性と、曖昧さ、そして宗教者や易者、大工など専門家によって占われるという事情から、何かしら、あたかも「家相」という知識体系が存在しているような感じを受ける。家相は風水思想の一部であり、陰陽道に大きな影響を受けており、様々な宗教と融合し、様々な人びとによって判断されている。極めて多様な形で受容されているのが現状である。ある意味では、風水思想の一部であると判断できないほど、かけ離れた形にまで変貌しているものもあるであろう。そうした現状を「日本において、風水は風水として受容されなかった」⁽³⁷⁾と片付けるのは容易である。とはいえ、このような実態を明らかにしていくことは重要であり、民俗学の大きな課題の一つであると思われる。特に諸外国との比較を通して自国の民俗文化を明らかにしていくことを目的とする比較民俗学の題材としては適切な対象であると思われる。

そこで、こうした多様な形態で受容されている家相を把握していくために、まず家相見の流派、及び刊行された多くの家相書を検討していくことによって、家相を民俗学として扱うための枠組みを構成していきたい。

(2) 家相書と家相見の流派

江戸時代における家相界の様子について玉置豊次郎⁽³⁸⁾、横山敬⁽³⁹⁾などの研究が詳しい。ここでは両氏の研究を手がかりにして整理していきたい⁽⁴⁰⁾。

① 家相見の流派

江戸時代、明和期（1764-1771）幸徳井家土御門家において停滞しきっていた家相界に神谷古暦は

活をいれた。彼には多くの門人がいた。彼の門人で著名なものは以下の人たちである。

神谷古暦－平岡米山－浅井金蘭－太田錦城－荒井堯民－海保漁村

正田慶明は天明期(1781-1788)の人で奈良の住人。『黄帝宅経』を翻刻。

松浦東鶏は寛政期(1789-1800)の人で大阪の住人。近世の家相観の発展に最も大きく貢献した。

松浦琴鶴も寛政期の人で、大阪の住人。松浦東鶏の門下生だったが、東鶏と相容れず一派を形成する。

尾島碩聞は明治期の人で松浦琴鶴の門下生。関東に近世家相観を広めている。

他に著書の多い人として、小泉松卓、苗村元長、吉田徳謙、多田鳴鳳、平沢白翁などがあげられる。

こうした家相諸派が生み出された原因として、どの場所を住宅の中心として考えるかという点である。

家相をみていくためには、方位を正確に把握する必要がある。そのため磁石が使用されるのだが、どこに磁石を置くかという点、換言するならばどの場所が住宅の中心なのかという点をめぐって、各家相流派によって論争が引き起こされた。磁石を置く場所としては、以下の説がある。

- (a) 大黒柱説
- (b) 大棟の中心説
- (c) 住宅は主人の正寝、商店は店の間、武家は玄関説
- (d) 本宅の中央説
- (e) 惣構の中央説
- (f) 大門は庁事、傍屋は大楼中心説

こうした諸説のなかで、(c)の住宅は主人の正寝説は陰陽道を公的に司る土御門派が主張している説であり、日本では最も古くから採られた方法である。(f)大門庁事説は清朝の協紀弁方通徳類情に載せられているもので、宮廷の大建築の判断に適しているとされている。(d)の本宅の中央説は松浦両派によって主張されているものであり、最も広く普及している説である。

次に家相を見ていく際に取り上げられる点を見

ていきたい。

地相：周囲の環境の吉凶と敷地の欠張

道路：方位

本宅：平面の欠張

付属屋：方位・規模・本宅の棟高との比較

茶室隠居座敷：方位・規模

屋内施設：

玄関：方位

台所・便所・浴室：方位

竈・神棚・仏壇：向き及び向い合い

段梯子：向き

格子・窓・天窓：位置

火燵井戸裏：位置

畳数：枚数

屋外施設：

門戸：方位

神祠：方位・規模

井戸・手水鉢・水溜：方位・構造

池・泉・水庭・石燈・籠・飛石：配置

樹木：庭木の種類

以上のような点がみられる。しかしながら、各諸派によって重視する点と軽視する点があり、しかも家相家によっても異なる。したがって、実際には家相観というものは、各家相派、そして家相家によっても異なる。

② 家相書

江戸時代以降に出版されている主な家相書を列挙していきたい。

『家相口訣』 古易堂大江桐陽 1782

『家相秘録』 正田慶明 1783

『家相図解』 松浦東鶏 1798

『家相玄機略』 (矢内貞訓写本) 1799

『相地相宅方位付屋 奥義』 (矢内貞訓写本)

1799

『家相伝口伝最初』 (矢内貞訓写本) 1799

『家相図説大全』 松浦東鶏 1801

『相宅小鑑』 苗村三蔵 1802

『家相大全』 長田藁雀 1803

『家相必要方鑒精義大成』 松浦東鶏 1804

『家相図解全書』 長田藁雀 1804

『三才発秘抄要』 苗村三敲 1805
 『方角即考』 松浦国祐 1807
 『地理家相秘窮内外伝』 落合益・安藤秀林 1807
 『奥義免許 風水玄機録』 松浦東鶏 1810
 『家相秘伝四神書』 松浦東鶏 1810 (明治写)
 『家相本義』 佐藤藏人 1811
 『家相免許』 1812
 『家相故歴伝』 松浦東鶏 1813
 『方位宅相 三才精義』 西岡玉全 1815
 『地理山水 風水秘録』 西岡玉全 1816
 『家相秘書』 秋野法師門人山田某 1816
 『方鑾秘訣集成』 吉田元祐 1817
 『方鑑班鳩夜話問答集』 松浦東鶏 1818
 『方家図説 (家相方位図説)』 賀茂保久 1820
 『八方明鏡便覧』 吉田徳謙 1822
 『八方明鏡大全』 吉田徳謙 1825
 『家相速伝』 福島正富 1825
 『竜背発秘』 荒井堯民 1827
 『方位吉凶 家相秘伝録 (一貫流秘伝家相福臻録)』 一貫堂 1829
 『相宅心書』 浅井米山 1830
 『宅相方鑑 風水園筆草』 松浦国祐 1831
 『方鑑口秘書』 松浦琴鶴 1832
 『家相方位日撰秘伝』 高岡晴雲堂 1832
 『地家方位或問』 賀茂保久 1833
 『日要精義大成』 松浦琴鶴 1834
 『方鑾弁説』 松浦琴鶴 1834
 『地理風水家相一覧』 松浦琴鶴 1834
 『龍背師伝図説』 荒井堯民 1835
 『方鑾類要』 松浦琴鶴 1837
 『方鑾秘伝集』 松浦琴鶴 1840
 『家相秘伝集』 松浦琴鶴 1840
 『方鑑家相方鑑秘伝集』 松浦琴鶴 1841
 『経験精義』 松浦琴鶴 1842
 『宅方明鑾』 平沢白翁 1844
 『家相千百年眼』 平沢白翁 1845
 『春雪解話』 荒井堯民 1845
 『家相辯義』 松浦琴鶴 1845
 『相宅天鏡』 宍戸富 1846

『人相家相独談義』 雲城古老 1846
 『地理風水 家相深秘』 松浦幸最 1847
 『洛地準則』 多田鳴鳳 1859
 『方鑾懷宝便覧』 市川琴齋 1861
 『家相方位徴古説』 溝口省翁 1861
 『家相改正口義伝』 藤田寛齋 1865
 『方位家相判断』 松浦筑後 1867
 (明治時代)
 『家相方位二十四山方位秘訣』 小泉重郷 1892
 『家相秘伝集』 松浦琴鶴 1894
 『家相宝鑑図集』 柄澤照覚 1909
 『家相極秘伝』 星文館主
 『家相・地相・方位』 志賀重介 1923
 『家相の見方』 山田 照 1961
 『家相の見方直し方』 神宮館編集部 1969
 『家相真法秘要』 田中昌穂 1969
 『家相の話』 神宮館編集部 1972
 『家相の見方』 白鷺宮 1974
 『東洋占術家相入門』 佐藤文栞 1976
 『家相盤』 松永好永 1950
 『家相の吉凶 (家運を開く家相はこれだ!)』 鶴野晴山 1981
 『家相学入門 (人生の吉凶を支配する)』 小林三綱 1983
 『よい家相・悪い家相』 鶴野晴山 1941
 『家相の見方』 横井伯典・佐藤六龍
 『家相の科学 (建築学が発見したその心理)』 清家清 1969
 『家相 (現代の家相とその考え方)』 山片三郎 1971
 『家相の設計 (住宅のプランニングに生かす現代の科学)』 岡本輝三 1979
 『家相読本 (デザイナーのための)』 光藤俊夫 1981

このように数多くの家相書およびその解説書が出版されている。とはいえ、ここで列挙した家相書とその解説書はほんの一部にすぎないため、その背後にある社会的状況まで言及することは不可能である。しかしながら、これまでの研究によると江戸時代には大阪と江戸が出版地の二大拠点で

あり、特に関西方面の方が家相は発達していたことが明らかになっている⁽⁴¹⁾。

こうした、いわゆる活字化され、出版された家相書だけではなく、民間レベルでは家相書の写本、あるいは旧家の古文書などのなかに家相に関する知識が記載されていたりしており、様々な形態、経路で広まっていったと推定される⁽⁴²⁾。

大工がその技法を記した文書の中にも家相に関する記述を見いだすことが出来る。例えば、法隆寺の宮大工である長谷川家、石崎家、木子家に伝わる『愚子見記』には、建築一般の知識だけでなく、家相や地相、建築儀礼に関することなどが載っている⁽⁴³⁾。

こうした様々な形、そして経路で受容された家相観を考えていくうえで、取り合えず、列挙して来たこれらの家相書を、前節で取り上げた家相諸派別に分類・整理することによって、受容経路と年代の概要を検討する指針にしていきたい。

神谷古曆派

荒井克民著作

『竜背発秘』 1827

『龍背師伝図説』 1835

『春雪解説』 1845

浅井米山著作

『相宅心書』 1830

正田慶明派

『家相秘録』 1783

松浦東鶏派

松浦東鶏著作

『家相図解』 1798

『家相図説大全』 1801

『家相必要方鑒精義大成』 1804

『奥義免許 風水玄機録』 1810

『家相秘伝四神書』 1810（明治写）

『家相故歴伝』 1813

『方鑑班鳩夜話問答集』 1818

松浦琴鶴派

松浦琴鶴著作

『方鑑口訣書』 1832

『日要精義大成』 1834

『方鑒弁説』 1834

『地理風水家相一覧』 1834

『方鑒類要』 1837

『方鑒秘伝』 1840

『家相秘伝集』 1840

『方鑑家相方鑑秘伝集』 1841

『経験精義』 1842

『家相辯義』 1845

『家相秘伝集』 1894

その他の松浦姓の家相家の著作

松浦国祐著作

『方角即考』 1807

松浦幸最著作

『地理風水 家相深秘』 1847

松浦筑後著作

『方位家相判断』 1867

その他の家相派

吉田徳謙

『八宅明鏡便覧』 1822

『八宅明鏡大全』 1825

多田鳴鳳

『洛地準則』 1859

平沢白翁

『家相千百年眼』 1844

『宅方明鑒』 1845

以上が、前節で取り上げた家相諸派別に分類したりリストである。これをみてわかるように、家相界においては両松浦派による家相書が他の諸派に比べて圧倒的に数多くあり、このことは前述したように、磁石を置く場所を本宅の中央とする説が最も広く採用されているとともに松浦派が家相界において大きな勢力を持っていたことがうかがわれる。

(3) 建築学における家相研究

建築学では1950年代頃から、特に建築史学の分野からの新たな民家研究が盛んになってきた。建築学的な構造分析、復元と編年という従来の建築学的方法に加えて、普請帳や棟札、あるいは大工の流派、技術や組織、研究対象の家に残されている文書等の文献資料をも研究対象として利用するようになり、大きな成果をあげてきた。

そして、その過程のなかでいわゆる家相書の類いに対しても注意が払われるようになった。玉置豊次郎は、家相見の様々な流派について論じている⁽⁴⁴⁾。その後、横山敬は各家相書について分類を試みている⁽⁴⁵⁾。

清家清は従来、建築学や自然科学的な立場では「迷信」として退けられていた家相書の内容に対して、建築学的な意味でも真理をついていて、その科学性について論じた⁽⁴⁶⁾。その後、建築学では清家と同じように、家相書が持つ建築学的な知識・合理性についての研究がなされるようになっていく⁽⁴⁷⁾。そこで最近の建築学における家相研究について見ていきたい。

須貝高らのグループの研究をみていきたい⁽⁴⁸⁾。少々長いが、須貝らのグループが述べている家相研究の目的の部分を引用してみたい。

「科学技術の進歩、西洋住文化の影響によって住宅はさまざまな変遷を遂げて来た。換言すれば人間は常に住宅により高度な機能、さらに性能を要求して来た。しかし一部では家相がその科学的根拠不明のまま、住宅設計に少なからず影響を与えてきたことも一般に知られている。従って、家相が科学的視点から検討され、わずかでも解明されれば、家相に束縛されていた部分の場合によっては開放されることになり、より自由なプランニング、空間を創造することが可能になると考えられる」(下線：論者)

彼らの方法論は「A) 家相に関する文献を収集し、浴室、台所、便所に関する方位の吉凶の相互比較を行ない、文献によってどのように違いが生じているのか実態を明確にする。B) 文献の水廻り部の方位の吉凶及び鬼門に関する客観的説明記述部分を実証されている科学的データに基づいて検討し、その妥協性を分析する。」というものである。

そこで、扱われた文献は19種類で一般に入手できる家相書及び、図書目録から洗濯された(5カ月という時間的制約のなかで入手出来たもの)以下の文献を分析対象としてあげている。

①『家相秘伝集』 松浦琴鶴 1894 6 15

②『家相宝鑑図集』 柄澤照覚 1909 12 2

③『家相極秘伝』 星文館二主

④『家相・地相・方位』 志賀重介(志賀流易断本部本部長) 1923 6 2

⑤『家相の見方』 山田 照 1961 9 1

⑥『家相の見方直し方』 神宮館編集部(神宮館編集部) 1969 9 1

⑦『家相真法秘要』 田中昌穂(環境生態研究所主宰) 1969 10 15

⑧『家相の話』 神宮館編集部(神宮館編集部) 1972 8 25

⑨『家相の見方』 白鷺宮(社日本易学連合会理事) 1974 8 30

⑩『東洋占術家相入門』 佐藤文栄(東洋五術運命学協会) 1976

⑪『家相盤』 松永好永(有住田楼代表取締役社長) 1950 2 25

⑫『家相の吉凶(家運を開く家相はこれだ!)』 鶴野晴山(建築設計業 日本家相建築連合会会長) 1981 春

⑬『家相学入門(人生の吉凶を支配する)』 小林三綱(東京易占学校校長) 1983 9 5

⑭『よい家相・悪い家相』 鶴野晴山(建築設計業 日本家相建築連合会会長) 1984 7 1

⑮『家相の見方』 横井伯典・佐藤六龍(日本運命学会主宰)

⑯『家相の科学(建築学が発見したその真理)』 清家清(東京工業大学教授) 1969 1 2 15

⑰『家相(現代の家相とその考え方)』 山片三郎(一級建築士) 1971 10 15

⑱『家相の設計(住宅のプランニングに生かす現代の科学)』 岡本輝三(岡本輝三建築設計事務所所長 一級建築士) 1979 10 15

⑲『家相読本(デザイナーのための)』 光藤俊夫(竹中工務店) 1981 8 20

こうした文献の分析を通して須貝らは、(a) 文献間における吉凶の統一性がないこと、(b) 水廻り部分及び鬼門に関する客観的記述と科学的データとの整合性がないこと、(c) 水廻り部分の吉凶判断の要因は科学的根拠によるところは少な

いこと、(d) 水廻り部分においては鬼門とされる方位を特別に意識する必要はないことを明らかにし、家相による水廻り部分の方位の吉凶判断は、科学的根拠によるところは少ないと結論づけている。

このように、建築学における家相書の研究は、ある家相書の内容が建築学的な心理、あるいは科学的合理性を持つのかという点について、特に関心を持っているようである。ある意味では、明治維新以前の知識、その知識は科学的合理性に基づく建築学という学問体系における知識では、従来「迷信」あるいは研究対象以外のものとして扱われてきたのだが、そうした従来の知識を、科学的合理性に基づく知識として再認識しようという方向である。多少大きく捉えるならば、「擬似科学」としてあるいは、いわゆるニューサイエンスとして捉えようとしているとも言える。

また、須貝らのグループの研究の目的は、旧来の家相が持つ知識に束縛されていた部分からの開放を目指すものである。「迷信」からの開放と科学的知への啓蒙という側面をも指向していると言えるだろう。そして、家相に関する文献にもその傾向を伺うことが出来る。例えば、須貝らが研究対象とした文献を大別すると、いわゆる占い関係の文献がほとんどであるが、⑯⑰⑱は建築士によって書かれた文献であり、それらは家相を建築学的にとらえようとする姿勢が見受けられる。

また、須貝らの研究は地域性については言及しなく、人間生活の基盤である住まいを民俗全体のなかでとらえようとしているのではない。一つのケーススタディーとして家相を取り上げているのではない。

このように、建築学における家相研究は、基本的に建築士、換言するならば建築に関する専門的な教育・知識を持っている人びとによる研究であり、研究対象も家相に関する文献という特定の専門知識に対しての研究である。そのため、そこには担い手である家相見をしていた人びと、職業としていた人びとの状況、大工の家相に対する見解、あるいは民間での普及の度合いという点に対して

は、ほとんど注意が払われていない。現代なお、家相占いの本が書店を賑わしている状況、そしてその背後にある人びとの生活と住まいに關しての心意については無関心なのである。そこで、彼らの視点から欠落した人びとの心意を研究していくことこそ、民俗学における家相研究の可能性が秘められているように思われる。

3 民俗的知識と家相

これまで、家相書と家相諸派という家相を専門的に見る人びとについて述べてきた。本節では、実際に民俗レベルでは家相がどのように受容されてきたのか、従来の民俗学における家相についての研究はどうであったか見ていきたい。そして、そこから従来の研究の長所と短所を明らかにしていき、今後の家相研究の展望を見ていきたい。

(1) 宅地の選定と間取りの決定—事例を通して—

具体的な事例を通して、民俗レベルにおける宅地の選定と住居の評価（間取りの選定）の様子をみていきたい。

①米沢市田沢地区の間取りの選定と家相⁽⁴⁹⁾

(a) 土地の選定

住居を建築する場所は、道路からの距離、雪、風向き、日当たり、などの自然環境を重視して選ばれた。しかしながら、田沢は谷間に広がった集落であるため、宅地として利用できる土地は限られていた。

田沢地区は積雪が2メートル近くにもなるため、特に雪に対しては細心の注意が払われた。道路からの距離は、玄関から道路までの除雪が大変なため、最近新築された家では、元の場所から国道の側に場所を移した家もある。基本的には道路よりも一段高い場所が良いとされた。また、屋根の雪を降ろした時の雪の捨て場所の関係から、隣の家との間隔にも注意が払われた。

水道が普及するまでは沢水を利用していたため、水の流れにも注意が払われた。山裾、特に雪崩が起こりやすい場所や雪崩が起こった場所は嫌われた。また、川端も洪水の影響を受けやすいた

めに避けられた。

風向きは特に西風と南風が注意された。田沢は西からの季節風が強いので、西側に山か何か風を避けるものがある場所が良いとされた。ただし、山からの吹きおろしの風が強い場所は避けられた。南風がきられわたるのは台風の際に南からの強風が吹くことが多いからである。基本的には風が強い場所は避けられたが、最近の家ではうまく風向きを利用して、風通しが良く夏過ごしやすいうに工夫している家もある。

こうした自然環境だけではなく、墓地や神社、行屋の跡地等は祟りがあるため避けられた。方位を気にする人は伝澤寺に頼んで土地の方位を占ってもらう人もいた。

(b) 間取りの選定

住居の間取りは大工と建築主の話し合いによって決められていった。大工は建築主に様々なアドバイスをしていた。例えば、日当たり、風通しなどへの特に注意を払う。基本的には日当たりが良いようにするが、便所等の汚物がある場所はあまり日当たりが良くない場所にした。風は前述したように西風と南風には特に注意が向けられ、東から南に風が抜けるようにするのが良いとされた。

方位については、毎年配られる高島暦をみながら決めていった。特に方位を気にする人は伝澤寺に頼んで土地の方位を占ってもらった。大工自身も方位書を持っており、田沢で長年にわたって大工を務め、その父も大工であったH。H氏は昭和7年刊行の『家相秘傳圖』（東京神宮館）を参考にしていた。間取り図の中心に磁石を置き、方位書や暦本を参照しながら間取りを決めていった。特に注意したのは鬼門の方角で、この方角には玄関、便所、家の主人が休む部屋は避けられた。また、トシトクの方向に玄関が向くようにした。コンジンサマのいる方角も調べられ注意された。

こうした方位による家相を見ることだけでなく、田沢では上座敷、下座敷と言い、曲がり屋の座敷が川の上流を向いている家を上座敷、同じように座敷が下流を向いている家を下座敷と俗に言

う。そして、上座敷の家の方が栄え、下座敷の家は落ちぶれると俗に言われている。

①福島県大沼郡大芦地区の間取りの選定と家相⁽⁵⁰⁾

(a) 土地の選定

大芦集落の、新しく分家を出す場合について述べよう。たいてい分家が新しく屋敷を建てる場所は、本家が所有する土地に建てる場合が多い。本家の近所に建てるのが最もよいとされているが、適当な土地がない場合は本家と同じ坪の中に建てるのがよいとされている。そして、本家、厳密に言うならば土地を提供した家を、デワケシンルイと呼び、シンルイヅキアイの中でも、最も強い結びつきを期待され、末代まで付き合わねばならないとされている。従って、マケと呼ばれる各同族集団は、空間的にまとまって存在する傾向にある。以上のことから、建築場所を選定する場合、本家の所有する土地に建てるのが好まれたこと。土地を提供した家をデワケシンルイと呼び、シンルイヅキアイの中でも、最も強い結びつきを期待され、末代まで付き合わねばならないとされていること。最初に屋敷を建てた土地とそのイエは特別な関係があるとみられていること。この三つのことが指摘される。

(b) 間取りの選定

大芦では、イエを新築する場合、だいたい農作業が一段落した11月頃からその準備に入る。新しくイエを建てる土地は、そのイエの事情によって違うが、遅くとも12月頃までには決めてしまう。土地が決まると、人によるが、方位を気にする人は太夫に頼んでその土地の吉・凶を見てもらう。現在、大芦には太夫はいないので、下流にある中向に住んでいる太夫に頼む。太夫は、代々受け継がれてきた文書によってその土地吉・凶を占う。方位の占いは、基本的には大工と同じで、東西南北を調べ、十二支を基に更に細かく空間を二十四の方位に分ける。つまり、北を0度として各空間を15度の角度で24に分ける。次に、その土地の鬼門（45度）、地門（135度）、病門（225度）、天門（315度）を見つける。そして、その方位の吉・

凶を調べていく。どの方角に何を建てて良いかなどの判断は、原則として大工がするので、太夫はあまりやらない。しかし、その年き歳徳神はどの方角に居るかは太夫が調べる。

実際に方位を占う場合はほとんど『神宮館運勢暦』などに頼っているのが実態である。いずれにしても、太夫は方位を調べることはあっても、実際にその方位に適した間取りなどを決めるのは大工の仕事とされている。つまり、空間の特性を確認し、間取りを決め建てるのは大工の仕事である。

建築場所が決まると、家主は12月の吉日を選んで、大工の棟梁のところに頼みに行く。そして、その日から7～10日後にキワリと言ってイエの間取りや材料、費用、期間などに関する打ち合せを大工の棟梁と行なう。大工の棟梁と話し合い、イエの間取りとどの方角に向けて建てるのかなどをこの時に決める。

大工の棟梁は、代々受け継がれてきた古文書と『神宮館運勢暦』などの暦を用いてその土地の方位を調べ、その方位に最も適した家の向き、間取りを決めていく。しかし、家主の希望する間取りや家の向きと方位とは必ずしも一致しないことも多い。その場合は、なるべく家主の希望を尊重して、方位に対して微妙に角度を変えるなどして解決していく。また、方位だけでなく、その土地の日当たりや水の便などにも注意する。

間取りのなかで最も方位を重視するのはゲンカン、ダイドコロ、ベンジョである。ゲンカンは、必ず北東の方位を向かないようにする。この方位は鬼門にあたり、ゲンカンばかりでなく、あらゆる出入口、窓なども作らずに外部の空気から遮断し、この方位には壁などを作るようにし、入り口がなるべく南西方向に向くようにする。鬼門から、侵入しようとする不幸を防ぐためだと言われている。南西方向に向けるのは、鬼門と正反対、つまり対角線上にあり、不幸を防ぐことができるからである。ダイドコロ、ベンジョは北向けに作るのがよいとされる。北向けにすることによって、直射日光を防ぐことができるので、食物の保存に適し、また悪臭を防ぐことができるからである。ま

た、北西の方位、乾の方角には窓を付けるのは好まれない。北西の季節風が強いためで、この方角に風を防ぐ屋敷林を植えることが多い。

例えば、星友実家が明治6年に家を新築したときに大工に見てもらった方位と間取りの図によると、住居の中心、イマとチャノマの境を基準にして方位を調べている。そして、前述した方位に注意して間取りを決めた。その結果、ゲンカンは地門の方角で吉、そして、ダイドコロはほぼ北東の方角で吉、ベンジョは東の方角で、大使用が甲の方角で吉、小使用は卯の方角で凶、ウマヤ(厩)は寅の方角で凶となっている。また、鬼門、乾の方角には窓は作られていない。乾の方角には住居の外に木が植えられている。住居の外にいくつか納屋を作るための予定地が書いてあるが、結局、乾の方角が大吉だったので、そこに建てた。

以上のように、建築場所の選定、得に方位観に関しては、太夫よりも大工が中心になって行なわれる。そして、方位観、家相観の伝承は、代々伝わる文書によって伝承されているが、実際には『神宮館運勢暦』などの市販の出版物に頼っているのが実情である。

(2) 民俗的知識と家相

前節で取り上げた家相と屋敷と間取りの事例を通して、これまでの民俗学における家相研究の長所と短所を検討していき、今後の家相研究への覚書としたい。

これまでの民俗学においては、宅地の選定と住居の評価(間取りの選定)に関しては、多くの民俗調査報告書に見受けられるように、その内容は、社会的なコンテキストとその地域の特徴的な住宅の間取りについて報告しているだけのものが多く、どのような宗教者がどのような文書を使用して占ったのかという点についてはあまり触れていない。つまり、誰が家相判断をしたのか、どのような家相書あるいはその類が使用されたのかという点については、ほとんど関心が払われていないようである。これは、聞き書きを中心とした調査方法に原因があるかもしれない。

例えば、先にあげた事例とも聞き書き調査を中

心にして集めたものである。そのため、どのような家相書あるいはその類の文書が使用されたのかについては未調査であり、この点は今後に残された大きな課題である。

また、話者の年齢・職業について分類していない点である。その地域の年寄を中心に聞き書きを行なったため、若い人びとの家相に関する意識や意見までは調査されていない。また、大工にもかなり話をきいたのだが、大工とその地域の人びとの間の知識の量と質の差異までは言及できていない。と言うよりも、その地域での宅地の選定と住居の評価に関する資料を得るために、話者の立場(年齢、職業)については注意を払っていない。今後は話者の立場についても留意しながら資料を集めることを目ざしている。

この二つの事例では、家相書あるいは家相家という家相を見ることを専門にしている人びとは直接関与していない。こうした家相家の活動実態についても見ていく必要がある。

しかしながら、これまでの民俗学においては、膨大な土地にまつわる習俗についての資料が蓄積されてきた。例えば、田沢の事例にある「上座敷・下座敷」や「忌み地」の事例などは、明らかに、家相書や家相見の知識とは異質なものである。他にも「三角形の土地は不吉だ」「座敷から自分の田畑が見える家は栄える」「本家よりも大きな家を建ててはいけない」等がある。こうした民俗知識については、大工や家相家等の専門的知識とは別のものであり、こうした知識をより丹念に収集していくとともに、専門的知識との差異、影響力といったものもみていきたい⁽⁵¹⁾。

地域性についても留意していきたい。例えば、田沢の事例では、宅地の選定において雪と風向きが非常に重視されている。風向きはその地域の地形や気候といった自然環境によって決定される。したがって、そこにその地域の特色が現われてくるはずである⁽⁵²⁾。そうした点についてもみていきたい。

家相観というものは、家相家、家相書、宗教者、大工、建て主、村の人とそれを受容する側によっ

て、受容された知識の内容、受容の仕方が異なっている。従来の民俗学において収集された資料は常民(村の人)の視点からのものがほとんどであり、今後はより総合的な視点で研究していく必要があると思われる。

4 今後の研究計画と展望

これまで見てきたように、家相観は様々な家相派そして家相書によって異なっている。そして、ある住宅の家相についての判断は、その住宅を建築した時に判断された家相と、建築後に見られた家相判断が異なっている場合もある。これは建築したときと建築後に見てもらった家相見自身が異なっている、あるいは流派が異なっている場合がほとんどであるが、同じ家相見によって見てもらった場合でも異なる場合もある。その原因は周りの環境の変化、あるいは住宅を増築あるいは改築したという理由からである。したがって、家相を研究していくためには、家相を絶対なもの、不変なものとして扱うのではなく、フレキシブルな立場で研究していく必要がある。

そのために、まずフィールドにおいて、その地域で使用された(使用されている)家相書あるいはその類の文書を見付ける必要がある。そして、その家相書の流派、版元、出版年、流布経路等を可能なかぎり明らかにする必要がある。そして、見つかった家相書の内容の特徴と他の流派の家相書等を参考にして明らかにしていく必要がある。写本の場合はどの家相諸派の影響が強いのか、どの家相書がオリジナルなのかという点についても注意し、どの点が強調されていてどの点が省略されているのかという点についても注意したい。そのことによって、家相で重要視されている部分とそうでない点を描くことができるからである。

次に、その家相書を使用した人の特徴、家相家なのか? 修験なのか? 神主なのか? その他の宗教者なのかを明らかにしていきたい。そして、その地域での他の宗教者との解釈の違い、知識の違いを明らかにしていき、誰の説明が最も説得力を

持っているのかについてみていきたい。また同時にどういった家が家相書を所有しているのかという点についても見ていきたい。知識としての家相がどのような人びとによって保持されていたのかという点を明らかにしたいからである。

また、土地や方位に関する俗信も集め、家相書や家相見、民間宗教者、大工等の知識とは別の民俗知識も収集していき、より総合的に調査し研究していきたい。それによって、家相書を見付けた地域での、民俗方位、家相書の内容と実際の民家の空間構成とのずれ、その地域での特徴などを描きだすことができると思われる。ただ注意すべき点は資料の収集において、それぞれの立場での知識、家相観をうまく抽出できるかということと資料の質と量をどのように判断して処理していくかという点については今後の大きな課題になるであろう。特にいわゆる俗信等の資料の扱い方が問題になってくると思われる。

現在、調査を予定している地域は以下の地域である。

(1) 群馬県吾妻郡岩井村

ここには伊能家という旧家があり、『伊能家文書』と呼ばれる数多くの史料が群馬県史編纂室によって収集され整理されている。そのなかに天保13年に同家屋敷を改築あるいは新築した当時の家相書が3書、家相図が2図現存している。また、群馬県では数多くの家相書、家相図が県史編纂室によって収集されている。現時点では、最も資料が豊富なため、伊能家を中心にして集中的に調査、資料収集を行ないたいと考えている。

(2) 福島県大沼郡昭和村

昭和村在住の本名氏は大工で、これまでも断続的に調査を行ってきた。家相図に関しては2図収集した。同家は家相家と大工文書を所蔵しているが未見のため調査を行う予定である。また、同村の五十嵐一家も文書を数多く所有しているが、じっくり文書の調査は行っていないために、今後丹念に資料を見ていきたいと考えている。

最後に、今後民俗学の立場から風水研究としての家相研究を進めていくに当たって、今後の展望

を述べたい。

風水説は東アジアに広く受容された思想であり、日本にも受容され、家相という風水説の一部分だけが特に発達した。こうした家相が特に発達したという受容形態の民俗レベルでの実態を明らかにすることは、民俗学の課題である。そのためには、ケーススタディーを中心にした地道な資料の提示をしていかなければならない。そして、ある程度、家相研究の方法論的な見通し（恐らく一つのケーススタディーの抽出方法になると思われるが）ができたならば、その方法論で諸外国（中国、台湾、朝鮮）との比較を試み、比較民俗学として家相研究を進めていきたいと思う。まずは自国の文化、民俗を把握した後に、比較民俗学的な研究を進めていきたいと思う。

【註】

- (1) 村武精一『祭祀空間の構造—社会人類学ノート—』東京大学出版会 1984
- (2) 渡邊欣雄『沖縄の社会組織と世界観』新泉社 1985
- (3) 渡邊欣雄『風水思想と東アジア』人文書院 1990
- (4) 福田アジオ「ムラの領域」『日本村落の民俗的構造』弘文堂 1981（初出「村落領域論」『武蔵大学人文学会雑誌』12-2 1980）
- (5) 宮家準『宗教民俗学』東京大学出版会 1989 325ページ
- (6) 宮家前掲 326 ページ
- (7) このようなギャップを埋める試みとして、坪井洋文の業績（「漁撈民の世界観—房州—漁村の分析—」『民俗再考—多元的世界への視点—』日本エディタースクール出版部 1986、初出「日本村落社会における世界観の一考察」早稲田大学理工学部『人文社会科学研究』15 1977）や松崎憲三の仕事が興味深い。（「村落の空間論的把握に関する事例的研究—千葉県海上町倉橋を試例として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第2集 1983）

- (8) 渡邊前掲 1990
- (9) 朝鮮総督府・村山智順『朝鮮の風水』国書刊行会 1931(1972 復刻)
- (10) 牧尾良海は数多くの風水に関する思想的研究がある。年代別に列举すると、「風水思想小考—郭濮とその前後—」『福井博士頌寿記念「東洋文化論集」』1969, 「デ・ホロート風水思想の歴史と其の専門家たち」『大正大学研究紀要』第56号1970, 「風水思想の一局面—四神相応について—」『密教学研究』第3号1971, 「デ・ホロート風水思想の歴史と其の専門家たち」『大正大学研究紀要』第57号1971, 「風水思想における四神について」『東方宗教』第40号1972, 「弘法大師と風水思想」『御誕生千二百年 弘法大師研究論集智山学報』第22号1973, 「朱子と風水思想」『梶芳博士頌寿記念論集「仏教と哲学」』1974, 「道教と風水思想」『吉岡博士還暦記念「道教研究論集」』1977, 「風水思想と仏教」『川崎大師教学研究所紀要「仏教文化論集2」』1977, 「風水思想の伝来と批判説」『三蔵』193・194号大東出版社 1980, 「風水思想と科学の間(上)」『川崎大師教学研究所紀要「仏教文化論集」3』1981, 「風水思想と中国山水画」(安居香山編)『識緯思想の総合的研究』1984 などがある。
- (11) デ・ホロート(牧尾良海訳)『中国の風水思想—地相術のパラード』第一書房 1986
- (12) 鄭正浩「台湾における風水の伝承」『牧尾良海博士頌寿記念論集「中国の宗教・思想と科学」』国書刊行会 1984 等があげられる。
- (13) 台湾の風水に関しては、鄭前掲論文があげられる。
- (14) 三浦國男『中国人のトボス—洞窟・風水・壺中天—』平凡社 1988
- (15) 竹田旦『木の雁—韓国の人と家—』サイエンス社 1983 や建築学の方からは、朱南哲(野村孝文訳)『韓国の伝統的住宅』九州大学出版会 1981 などがある。
- (16) 赤田光男『祖霊信仰と他界観』人文書院 1985, 「沖縄の風水信仰について」『村構造と他界観』雄山閣 1986, などがあげられる。
- (17) 渡邊欣雄や窪徳忠の研究があげられる。窪は中国文化が沖縄に与えた影響をみるという視点から研究している。窪「中国の后土信仰と沖縄」『沖縄の外来宗教—受容と変容』弘文堂 1978 などがある。
- (18) 渡邊欣雄は現在、最も精力的に風水研究を行っている。これまでの主な研究は『風水思想と東アジア』人文書院 1990 に収められている。
- (19) 沖縄風水研究会が組織されており、『沖縄の風水』平河出版社 1990 出版されている。その内容は、島尻勝太郎「沖縄の風水思想」、都築晶子「近世沖縄における風水の受容とその展開」、目崎茂和「風水・風土・水土」、堀田吉雄「風水とヤーノクシー南島の墓制めぐって—」、平敷令治「沖縄の亀甲墓」、赤田光男「洗骨習俗と風水信仰—伊是名島の葬墓制と祖先信仰—」、窪徳忠「沖縄県下の墓中符について」、照屋正賢「近世琉球の都市計画」、玉木順彦「沖縄本島北部の風水資料—真喜屋村・稲嶺村の事例—」の8本の論文が収められている。この本では、都築晶子が風水思想を文献的に実証的に論じており興味深い。また、玉木順彦が風水関係の資料を紹介している点も興味深い。ともすれば、結局論的に見えてしまう風水説に基づく村落景観を資料を駆使して、実証的に論究している点は高く評価できる。こうした資料に基づいた実証的な研究方法は今後大いに参考にしていきたい。
- (20) 自然方位と民俗方位とのずれ、そして研究者によって構築された理論とのずれという点から、その背後にある風水説に注目していったと考えられる。笠原政治、鈴木正崇等は自然方位と民俗方位とのずれに注目している。(笠原「琉球八重山の伝統的住宅—その方位と平面形式に関する覚書—」『民族学研究』39-2, 1974, 鈴木「波照間島の神話と儀礼」『民族

- 学研究』42-1, 1977)
- (21) 歴史学の方から、古代の都市計画、例えば平城京や平安京が陰陽道思想に基づいて建設されたという研究等がある。(例えば、玉置豊次郎『日本都市成立史』理工学社 1974) 地理学では、環境評価の一因として家相に古くから注目している。しかしながら、戦後は家相研究は発達しなかった。近年、歴史地理学の立場から、家相観の重層性を文献とフィールドワークによって実証的に研究した小口千明の研究が非常に興味深い。小口の研究方法是今後大いに参考にしたい。(小口「家相観にみる空間評価の相対性」『歴史地理学』122号 1983)
- (22) 渡邊欣雄『風水思想と東アジア』人文書院 1990 (128-129ページ) 初出：『沖縄の社会組織と世界観』1985
- (23) 牧尾良海「風水思想における四神について」『東方宗教』第40号1972
- (24) Feuchtwang Stephn D. R. 1972 "An Anthropological Analysis of Chinese Geomancy" Taipei: Southern Material Center
- (25) 玉置豊次郎『日本都市成立史』理工学社 1974
- (26) 吉野裕子『大嘗祭—天皇即位式の構造—』弘文堂 1987
- (27) 渡邊前掲 1990
- (28) 村山修一『日本陰陽道史総説』塙書房 1981
- (29) 高埜利彦「近世陰陽道の編成と組織」『尾藤正英先生還暦記念会編 日本近世史論叢(下巻)』吉川弘文館 1984
- (30) 林淳は近世における陰陽師と他の民間宗教者との間のトラブルについて、資料を提示している。(林「近世陰陽師の活動と組織」『愛知学院大学文学部紀要』1987)
- (31) 横山敬は江戸時代の家相書を広範囲に提示しその特徴を示している。(横山「家相という言葉と江戸時代の家相書について」『日本建築学会学術講演梗概集(九州)』1981) また、小口によると家相書の出版地は江戸、大阪が中心であった。(小口前掲 1983)
- (32) 玉置前掲 1974
- (33) 沖縄では風水が良くないと村落全体が移動したりしたことがあった。(都築前掲 1990)
- (34) 最近の書店には家相の本と並んで墓相に関する HOW TO ものの書籍が多く並んでいる。その内容は、正しい墓碑、墓碑の建て方・方位などであり、正しい墓は幸福を招き、正しくない墓は先祖供養がうまくいかないため不幸になると教えている。
- (35) 横山前掲論文
- (36) 渡邊前掲書、具体的な事例に関しては、後半部分で提示していきたい。
- (37) 渡邊前掲書
- (38) 玉置豊次郎「家相各派に就いて」『日本建築学会論文報告集』69, 1961
- (39) 横山前掲論文
- (40) 本節で取り上げる家相派、家相書は玉置、横山、小口の論文を参照した。家相書に関してはほとんどが現在のところ未見である。
- (41) 大阪、江戸が家相書の出版地の中心であったことは小口の研究で明らかにされている。また、江戸時代、大阪を中心とする関西地方が家相の専門的研究の中心地であったことが横山の研究によって明らかになっている。(小口前掲論文、横山前掲論文)
- (42) 伝達経路、伝達方法(担い手)といった点は不明であり、今後に残された大きな課題である。
- (43) 『愚子見記』井上書院 1983
- 『愚子見記』に記載されている建築の吉日、方位の吉凶などの内容は陰陽道文書の『簠簋内傳』と一致している点が多い、また、管見によれば、家相書の建築の吉日、方位の吉凶などの内容も『簠簋内傳』と一致するものが多く見受けられる。陰陽道が風水説の理論的な基盤になっていることを考えると、陰陽書の中でも『簠簋内傳』が大きな影響を与えていたのではないかと推定されるが、確固たる証拠はなく、今後に残された大きな課題である。(本

論では、『神道大系 論説編16 陰陽道』神道大系編纂委員会 1987 を参照した。)

(44) 玉置前掲論文

(45) 横山前掲論文

(46) 清家清『家相の科学』光文社 1969

(47) 例えば、宮野秋彦「家相の説と自然環境の相関について」『日本建築学会研究報告』(東海支部) 1981, 大下一司「家相の文献による方位の吉凶に関する研究—科学的視点からの水廻り部に関する分析(その一)」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1985, 須貝高「家相の文献による方位の吉凶に関する研究—科学的視点からの水廻り部に関する分析(その二)」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1985 などがある。また、平嶋道行は建築史的な視点から家相を取り上げている。(平嶋「家相図に見る町屋の建築的変遷—「油屋」本家と藤崎地区の町屋—」『日本建築学会研究報告』(九州支部) 1982)

(48) 大下, 須貝前掲論文

(49) 1990年8月に置賜民俗学会の調査に参加させていただいた時に収集した資料に基づいている。

(50) 1987年から1990年にかけて断続的に行なった調査に基づいている。大芦集落の空間構成と宅地の選定に関しては、拙稿「屋敷地の選定

と空間構成」『社会民俗研究』第2号1991を参照していただきたい。

(51) 家相書に載らない家相に関しては、玉置が数例をあげている。例えば、「四畳半の室の半畳を室の中心に敷かない」「竿縁は床差しにしない」「畳も床差しにしない」「畳はのの字に敷く」「二枚建具は右前にする」「よんまい建具は中二枚は主たる部屋の側に立てる」などである。玉置はこうした事柄を建築史的な立場から分析しており、近世以前の建築にはこうした禁忌は見られないことから、江戸中期頃からの家相新派によるものではないかと推定している。

こうした屋内の室内意匠に関する俗信、禁忌等は民俗学のこれまでの成果とも比較して考えていく必要があると思われる。例えば、畳に関することだと畳が敷ける階層は限られてくるため、階層差によっても変化が見られるかもしれない。また、畳自体が日本の住宅の特徴であり、諸外国との比較を考えていくうえでも何らかの視点の可能性を提示してくれるかもしれない。

(52) 小口は「富士向き」という民俗方位が家相書の内容と異っており、方位に関する知識が異なっていると報告している。

新刊紹介

窪 徳忠編著『沖縄の風水』

本書は、最近特に注目されつつある沖縄の風水説に関する論考を集めたものである。窪氏が編者を務めていることから明かなように、中国との関係という視点から沖縄の文化を把握しようとする動きと、沖縄県風水研究会が組織されたことから本書は産声をあげた。本書には以下の七つの論考と資料が収められている。島尻勝太郎「沖縄の風水思想」、都築晶子「近世沖縄における風水の受容とその展開」、目崎茂和「風水・風土・水土」、堀田吉雄「風水とヤーノクシー南島の墓制をめぐって」、平敷令治「沖

縄の亀甲墓」、赤田光男「洗骨風俗と風水信仰—伊是名島の墓制と祖先信仰」、窪徳忠「沖縄県下の墓中符について」、照屋正賢「近世琉球の都市計画」、＜資料紹介＞玉木順彦「沖縄本島北部の風水資料—真喜屋村・稲嶺村の事例」、都築晶子／玉木順彦「沖縄風水関連記事年表」最近の風水研究の動向を知るのに、最も適した書籍である。(宮内貴久)

A 5判 323頁 平河出版社
1990年9月刊行 3800円